

〈紹介〉

鎌田 廣夫 著

『天草本平家物語の語法の研究』

本書は、去る平成五年九月十一日に六十五歳で急逝された、故鎌田廣夫先生の御遺稿を整理してまとめられたもので、既発表の論文をまとめて一書に成したのではなく、全編書き下ろしといった性格のものである。内容は、キリシタン版『平家物語』（以下、『天草本』と略称）に関する総合的研究を目ざしたもので、全四章から成る。「序章」は謂わば概論で、『天草本』の性格を「文語及び古典文学」と同時に日本近代史の教科書」と規定される。敬語使用の実態やローマ字の分かち書きのしかたなどから見て、巻三までと巻四以降とが異なることを指摘され、複数の編者の可能性を示唆するとともに、また当時の言語実態を踏まえた上での『天草本』の位置付け、特色が要領よくまとめられている。

「第一章 天草本平家物語の構成」では、話の内容面からアプローチし、(1)人口に膾炙した和歌、挿話はもれなく取り上げていること、(2)筋立ての単純化、(3)感動を誘うような挿話ももれなく取り上げていること、(4)『平家物語』を四巻に圧縮していること、等の事実から、『天草本』は『平家』の精髓を伝えるためのものではなく、教科書としての性格から来るのであって、断じて『平家』の異本と呼べ

るものではないことを強調される。

「第二章 天草本平家物語の依拠本」では、『天草本』と『平家』の主要な二十六本とを詳細に校合して、以下に挙げるような依拠本を割り出された。①巻第一第一…慶長古活字本、②巻第一第二…西教寺本、③巻第二第二…斯道文庫本、④巻第三…斯道文庫本、⑤巻第三第九…巻第四第一…佐々木本、⑥巻第四第二…斯道文庫本である。そして、「天草本の依拠本が、平家物語の巻八の場合を除いて、すくなくとも三通りに区分されるのは、天草本の編者が三人ゐたといふことになる。これが私の主張である。」と結ばれる。

「第三章 天草本平家物語の語法の研究」は、代名詞篇と動詞篇とから成る。代名詞では、人代名詞（自称・対称・他称・不定称）と指示代名詞（近称・中称・遠称・不定称）に二大別され、依拠本と目される物との該当箇所の比較、当代の周辺資料との比較など十分に目を配りながら、網羅的に記述される。その結果、自称では、「拙者」「それがし」「身ども」などが、対称では、「御辺」などが『天草本』において特異な使われ方をしていることが示される。動詞は、「飽き足る・明く・飽く・あざわらふ・あそぶ・あつかふ・あはれむ・あひしらふ・あやす・あよむ・ある」が取り上げられている。おそらく、このまま「わ行」まで続けられていたであろうことを思うにつけても、「あ」で中断されてしまったことは、かえすがえすも残念である。先生には、さぞかし御無念であったろうと拝察する次第である。

（おうふう 平成十年七月刊）

林謙太郎